

鼠

「やあつ、鼠、鼠だ」

驚きの声が急に起つた。

蓮長と弁盛の立話を、五、六間はなれた、大杉の樹立の下で、今まで聞いておつた山法師の口々からでた言葉である。

どこから来たのか、五、六十匹の野鼠が山法師達の足許に迫つたのを、踏みつぶそうと、逆らつたのが悪かつたのか、数に勢を得ている鼠は、山法師達のからだに、急にかけて登つたものとみえる。

「おのれつ」とか「糞つ」と口々に罵しつて、鼠に登られた五六人の山法師達は騒ぎ廻つておるが、傍からみると、ものにつかれて踊つておるようにはかみえない、あさましい恰好であつた。

持つておるものが長刀だけに、少しも役にたたず、さりとして、からつと捨てるわけにもいかず、手の施こしようがない。幸いに頭巾を被つておるので坊主頭をかじられる心配はないが、気

持が悪くてちつとして居れない、互に騒ぎ立てるから、却つて鼠が暴ばれる結果となり、甲から乙へ、乙から丙へと、鼠が飛び移るので騒ぎはいよいよ大きくなり、鼻でもかまれたのか「痛い痛い」と叡山の荒法師にふさわしくない悲鳴をあげる奴がでてきた。

蓮長はこの悲鳴をきくと思わず、

「あつはつは、あつはつは~~~~」

と高声に笑つてしまった。

「こら、蓮長、何がおかしい」

自分でもあさましい恰好と思つておるところを、そばから笑われたので、怒り心頭に発した荒法師、ネズミにはかなわないが、蓮長ならばと、二人程長刀を振り上げたのがいた。ネズミは面白がつて長刀の柄を渡り始め行きづまると、逆戻りをして手許に走り出したので大言にも似あわず、

「わあつ」

と声をあげながら、長刀をほうり出してしまった。「馬鹿者つ」ほんの瞬間の出来事なので今まで、蓮長とともに此等の有様を眺めていた弁盛の口許から発した大喝である。「みんな動くな、仏像にでもなった気持で、じつとしておれ、眼をつぶれ、眼を」と言いながら、弁盛は腰の一刀をさつと抜き放つと、つつつと、騒ぎ立てる荒法師の側に進んだとみえたが、

「えいつ」

掛声諸とも、一人の山法師の肩に登ったネズミの首を見事に刎ねた。これは相当な使い手に相違ない。足許にばあつと落ちたネズミの死骸に驚いた山法師、思わず眼をあけてしまった。

「眼をつぶれ、さもないとネズミの首と一緒に、うぬらの首がすつ飛ぶぞ」

言うが早い、隣の山法師の頭に飛び乗ったネズミを、気合も入れずに、すうつと払った。血しぶきをふいてネズミが飛ぶ。

弁盛の刀風をきいて、ネズミよりはこの方が余つ程恐ろしいので、五、六人の山法師、其の場に羅漢さんのようにちつと動かず、堅く両眼をむすんでしまった。あわて出したのはネズミの方である。二、三匹してやられると、石か仏像になりきった山法師をみすてて、一勢に谷の方へと走り出したが、とまどいした五、六匹のネズミが急に蓮長の足許にせまってきた。

蓮長は素早く腰をかめると足許にせまったネズミをひよいと掴むようにみえたが、どうしたことか、ネズミは急におとなしくなつて、命でも請うように、ちゅうちゅうと鳴きながら、蓮長の足許にうづくまつてしまった。まるでネズミと遊んでおるようである。……今は、眼をあけて、啞然として山法師達はこのさまをみているだけだ。ネズミの血などで大事な腰の一刀を汚した弁盛、恥ずかしくなつたか、あわてて血も拭ぐわずに、刀をおさめた時、杉の小枝に逃れていたネズミであつたらうか最後の一匹がほつとした弁盛の頭の上にふつてきた。

「うわっ」

と声を上げた弁盛、先刻の大言壮語に似ず、正しく醜体である。声とともによろめいたので、そのネズミは蓮長の肩に飛びおりだ。軽くそれを押えた蓮長は、

「叡山三千人の衆徒の総大将たる弁盛殿のおつむに足をかけるとは、お前の命はないぞ、さあさあかくれておれ」

そういつて、そのネズミをやさしく懐中に入れて、立上りながら弁盛の顔を見た。

「あつ！」と驚いた弁盛、暫く輩下の山法師と同化して、口もきけなかった。

「弁盛殿、この山ではネズミは頼豪の生れかわりといわれて、みんなからの憎まれものでしたなあ、可哀そうに」

といつて、蓮長は静かに笑つていた。

叡山でネズミが頼豪の生れ代りといわれるのは「源平盛衰記」等に載せてある話で、白河天皇の時、叡山の宿敵たは三井園城寺の実相房頼豪が、天皇の後に皇子がなかつたので、恩賞は望み次第という御命により皇子御誕生を祈禱した。験あつて皇子御誕生に及んだが、頼豪は園城寺の年来の宿願たる戒壇の建立を望んだ。しかるに長歴年間より白河帝の御代に至る三十六年間、四度も勅命をもつて園城寺の戒壇建立を許されたが、常に武力をもつて叡山はこれをこぼんだ。よつて白河帝も、頼豪の望みは到頭不可能と諭された。頼豪は綸言を汗の喩えをもつてこれをきか

ず、御誕生の皇子を祈り殺さんと答へ、終に憤死して、死後大鼠となり数千万の鼠族を率いて、叡山の聖經を噛み破ったと言う。

蓮長の不思議な動作に驚ろいた弁盛、きまりの悪いのをてれかくして、

「蓮長殿、天晴れな手練をみたぞ、叡山と園城寺の合戦はもとをただせば法論より起きたこと、貴公その胆力をもつて一山法論の総大将となられい、山のかためはわれ等の役目ぢや、俊範上人の講義もおつつけ始まる時刻、こらつ、道をあげぬか、蓮長殿の邪魔になるわ」

弁盛の山法師を叱る声に、蓮長の足許のネズミは何時の間にか、皆逃げていた。

